みんなの広場

▲25年ぶりに屋根の葺き替えを行った小野家住宅。屋根職人の技を間近で見られた「小野家住宅見学会」。
2月15日㈯／林2丁目

▲厳しい寒さの中、熊手やほうきを使い雑木林の落ち葉掃きを行いました。「三富落ち葉掃き体験」。
2月2日㈰／中富地区の平地林

▲多くの武道愛好者が集い、真剣な演武・見事な技を披露しました。「第8回武道祭」。
2月2日㈰／市民武道館

▲昔からのいろいろな遊びを通して、世代間の交流を深めました。「富岡三世代まつり」。
2月16日㈰／富岡公民館

街かどズームイン Zoom in

▶皆さんからの「街かどズームイン」情報を募集▶採用者には事前に連絡します▶「誰でもエッセイ」ではテーマにそった投稿を募集▶はがきに300字以内で▶文章は添削あり▶掲載者には記念品を進呈▶次回のテーマは「春」▶もうすぐ待ち遠しかった春がやってきます▶春は心も体も暖かくしてくれることでしょう▶花粉症の人にはつらい季節ですが、暖かい陽気に誘われて出かけてみてはいかがですか▶皆さんの「春」の思い出や体験談をお寄せください▶締め切りは3月14日㈮必着▶住所、氏名、年齢、電話番号を明記▶送り先：〒359-8501・並木1-1-1所沢市役所秘書広報課「みんなの広場」係

大好きだった釣り

上安松・棚橋　かずみ

「魚」といえばうちの父。何よりも魚釣りが大好きで、休みのたびにバイクに釣り竿をくくり付け、近くの池や湖、時には宮沢湖・鎌北湖などにも走り回っていました。

ところが、昨年、定年を迎えてみると、さっぱり行かなくなってしまいました。あれほどまでに釣りが大好きだったのに…。やはり、「仕事をしているから、たまの休みの魚釣り」が楽しかったんですかね。

今は、母と一緒に買い物しながらの散歩が一番の楽しみのようです（笑）。

君の名は？

若狭・井上　美恵子

ある日、和食の店に行った。何にしようかと壁に貼られた「お品書き」を目で追っていると、「のれそれ」という4文字に一瞬目が点になった。「何それ？」と思いながら見ていたら、板前さんを見かけたので尋ねた。「穴子の稚魚です」とのこと。

時間の流れとともに忘れかけていたが、ある日新聞にその魚のことが書かれていた。「5月ころ、高知付近で捕れる長さ6㎝余りで白色透明、木の葉のような扁平な穴子の稚魚。網の中で伸ったり反ったりするのでそのように名づけられた」と。

読んでいるうちに食べたくなった。しばらくしてその魚と対面。初めまして、我が思いの君は、ワイングラスの中でおとなしく待っている。きれいな魚でのど越しも歯ごたえも良い。わずか4文字で私を魅了した君の名は？

「のれそれ」と申します。

刺身の味

久米・柳橋　コト

「毎晩刺身で晩酌できたら死んでもいい」とは義父の口癖だった。

私宅に泊まった1週間、その望みをかなえてあげた。4人家族の食費が消えてしまったけど、とてもうれしかった。刺身ぐらいであんなに喜ばれるなんて。

それから1年で義父は亡くなってしまったが、あの時の笑顔は忘れられない。

実父が「がん」の末期のときは、刺身だけは食べた。病院の近くの魚屋さんは、事情を知って2、3切れくらいを毎日作ってくれた。看病していた母は、人の情に心を潤しむと言う。本物の味は人の心を潤した。

食べ物に感謝などしなくなった今と、どちらが幸せだろうかと思う。

目玉が怖い

北有楽町・荻野　幸雄

長女が幼稚園の年長さんだったころ、房総のホテルでヒラメの活き造りが大皿の上にのせられて、テーブルに出てきた。

魚はピクピク動いていた。次女はお刺身が大好きなので食べ始めたが、長女は魚の目玉が動いているから怖いと背中を向けて食事ができなかった。家に戻ってからも、尾頭付きの魚がしばらく食べることができなかった。

その娘も、今は2人の子もの母親になり、東北の海沿いの町で、お魚大好き人間に変身。特に、鯛の目玉が好物で、最初に箸をつけて食べている。

柳瀬川

久米・内出　辰夫

私の祖父は魚捕りの名人だった。祖父は、まず竿作りから始める。壊れた番傘の骨などを利用してたちまち立派な竿ができ上がる。それを柳瀬川に持っていき、川をせき止め、その流れの強いところに仕掛け、一晩待つ。

そこへ産卵のために「郡来（正確にはウグイ）」が川をさかのぼって来る。このころのウグイを「アカハラ」と呼んだ。腹が赤く美しかったからだ。

朝、さっそく竿をあげに行く。そのときの胸のときめき。竿の中に魚影がキラキラ見えればそれはもう…！

その魚を持ち帰り、囲炉裏等であぶってから弁慶という薬苞に挿して保存した。

その当時の柳瀬川には、アカンチョ（ミヤコタナゴ）、ナマズ、ウグイ、ウナギ、ハゼなどが生息していた。

鮭と桶

久米・渡辺　秀子

まだ冷蔵庫も無かった昔の話。師走の声を聞くころともなると魚屋さんの店先には、頭を太い縄で縛った鮭が何ともつるされ、子ども心にも暮れの慌ただしさを感じ、間近いお正月を心待ちにしたものでした。

その鮭を、干し柿やだいだいと神棚の前にお供えした。

鮭は、長期保存ができるように塩をいっぱいしみ込ませてあるので、塩辛くてそのままでは食べられない。

お正月が過ぎた後は、深い桶に丸ごと入れ、何日か浸して塩抜きをした後で切り身にして炭火のこんろで焼く、身の締まったそれのおいしかったこと。懐かしく思い出されます。

おいしかった「ふぐ」

山口・長瀬　弘子

30年前、兄の会社を手伝っていたときのこと。

「ふぐ食べたことも無いのよね」と言ったのを兄は覚えていてくれたのか、ある日会社が終わった後、3、4人で小料理屋に連れて行ってくれることになりました。

兄が「先に行って食べていい」と言うので、「遠いわねえ」と言いながら食べ始めました。

ふぐの刺身や鍋、うれしくてどんどん食べていました。しかし、食べ終わってもとうとう兄は来なかったのです。兄は店の人に電話をかけていたのでした。

家に帰ってから、唇がブルブル振るえていたのにはびっくり。これは調子に乗り食べたからだったのかなと思ったけれど、翌朝には直っていました。

後日、兄に聞いたら「気軽に食べられるよう、行かなかった」と言っていました。「そうなの」とうと言いました。

その兄も今はいません。さみしい、うれしい魚の思い出です。でも、おいしかった。

小川から消えた魚

和ケ原・香坂　彪

私は、小学生のころを信州・伊那谷で過ごした。

夏休みには、河原の近くを流れる用水路で小魚を捕るのが楽しい遊びの一つだった。

用水路は、田んぼの集まる中央を流れ、天竜川に注いでいた。川幅は、1m足らずの小川だが、フナやドジョウ、ハヤなどの魚が天竜川からのぼって来た。大きなざるとバケツを持って、これらをすくいに行った。終戦が近いころなので、貴重なおかずにもなった。

終戦後は、町から大勢の人が買い出しに来た。その人たちは、黄色くなったキュウリや苗を切り取った苗床のさつまいもまでも持っていった。家の周りのヨモギは、1年中伸びなかった。

この年から、小川に行っても魚が一匹も捕れなくなった。北朝鮮の食糧事情が報じられるたびに、この時のことを思い出す。

はつらつ！ところ野老っ子

江森惇三さん
（中新井在住）

手作り太陽熱温水器の効果は抜群！

今年度、第7回目を迎えた「エコシティところざわ賞」。今回は、その受賞作品に選ばれた「ペットボトル手作り太陽熱温水器」を製作した、江森惇三さんをご紹介します。

江森さんは、20年ほど前に所沢に引っ越してきました。住み始めて少ししてから屋根に市販の太陽熱温水器を取り付けましたが、家に負担がかかるために取り外してしまいました。その後何年か経ったある日、光熱費を節約するために、手作りの温水器ができないかと考え始めたのです。「私の家は、良く日があたるのでひさしの部分を活用して作ろうと思ったんです」。

最初は、プラスチックを使った薄い箱を考えていたのですが、材料費がかかるので家にあるペットボトルを利用しようと考えました。ところが、作り始めると思った以上に大変でした。

ペットボトルを2本つなげるために底をくり抜くのですが、なかなかうまくいかなかったそうです。他の材料や接着剤選びも大変で、いろいろなお店に行き、やっと材料がそろいました。それからは、仕事が休みの土・日曜日を使い、4か月間かけて作りました。

ペットボトル温水器

やっとの思いでできたものは想像以上の効果がありました。冬場でも、水道水の温度が7度のとき、3時間ぐらいで22度まで上がったそうです。また、材料費が4～5万円かかりましたが、1年間で元を取れるくらい光熱費が安くなりました。

「ものを作るのが好きなので、始めると一日中やってしまいますね」と言う江森さんは、自分で直してみよう、やってみようという発想でいろいろと家の手直しもしていました。

「やはり、自然のエネルギーを使ったり、ものを再利用したりする資源循環型の生活が一番ですね。今後は、風力や太陽光をもっと利用してみたいです」と話してくれた江森さん。お金をかけないで、さらに家を改造する計画をお持ちのようでした。

Tokorozawa ものしりウォーキング ㉟ 亀ヶ谷・磯谷有技の碑

亀ヶ谷の柳瀬民俗資料館の敷地には、磯谷有技の碑があります。磯谷有技（1831～90）は、幕末から明治にかけて活躍した刀工であり、また宮本武蔵流の剣術家です。碑は門人らによって建てらたもので、以前は、城の県道所沢青梅線沿いにありましたが、平成8年に現在の場所へ移されました。

磯谷有技の碑

碑文によれば、磯谷有技は三河国（愛知県）岡崎藩主本多家の家臣の家に生まれ、通称を助蔵、名を吉光といいました。家は代々刀工で、父の吉達は武芸にも通じた人でした。

有技は13歳のときに、当時宮本武蔵流の師で同じ藩に在籍していた坂口与礼に剣術や武術全般を学び、後に同流を習得しました。その後、諸国を遊歴して剣の技を磨き、安政年間（1854～60）には、藩主本多家の剣術の師となりました。一方で、藩士の子弟の指導にもあたり、また刀剣の製作にも励んだといいます。有技の妻は城村（所沢市）の長倉家の娘ナカで、嘉永年間（1848～54）に父とともに江戸勤番であったときに出会い結婚したと考えられています。

明治維新を迎え、ほどなくして妻の実家である城村で暮らすことになり、明治23年に亡くなるまでの生涯を過ごしました。その間、多くの子弟に剣術を教え、その数は300余人であったといいます。門人は、城はもちろんのこと、所沢、大和田（新座市）、清戸（清瀬市）、小山（東久留米市）、中藤（武蔵村山市）などの村々に及んでいます。

城の旧家には、有技が息子に渡した一刀目録（太刀の打ち方や構えなどの極意を記したもの）や刀の押形（刀剣の銘や刃文などを写した図）などの貴重な史料が残されています。また、有技が作った刀は、現在知られているだけで埼玉県立博物館と入間市在住の子孫宅で所蔵する2振が残されています。刀工としての腕は父に及ばなかったようですが、この碑が示しているように多くの人びとから慕われていたことは間違いないでしょう。

柳瀬民俗資料館は、毎週日曜日（第5日曜日を除く）に開館しています。

柳瀬民俗資料館

誰でもエッセイ

テーマ "魚"

リサイクルふれあい館 不用品ガイド

●譲ります　▽マッサージチェア▽幼児用歩行器▽幼児用ハイアンドローチェア▽幼児用リクライニングバスチェア▽ベビーガード▽B型ベビーカー用雨よけカバー▽折りたたみバギーカー▽パソコン・プリンター▽ゴムセット▽ロックミシン（2本糸用）▽ゴムボート（オール付き・4人乗り用）

●求めます　▽エアコン▽留守番電話（子機付き）▽加湿器▽琴▽三線▽津軽三味線▽囲碁セット▽絵画用木製パネル（B版）▽ベビーカー▽乳幼児用横抱きだっこひも

受付方法　電話による先着順で紹介します。ただし、利用者は所沢市民に限ります。

休館日　月曜日、祝休日

申し込み・問い合わせ　リサイクルふれあい館（☎944-0008）

◎リサイクルふれあい館は、3月23日㈰をもって閉館させていただきます。

ご覧ください 広報テレビ番組

■テレビ埼玉
所沢リポート
3月28日㈮／①午後5時30分～40分②午後10時15分～25分放映

■シティケーブルネット
広報ところざわ テレビ情報館
3月20日㈭～／①午後1時55分～2時②午後9時55分～10時放映